

渋川市こども発達相談室ニュース 2023年1月号

～あけましておめでとうございます、本年もどうぞ宜しくお願い致します。～

不登校、引きこもり、いじめ、非行、自殺

いきなりセンセーショナルなタイトルですが、今月は敢えてこのテーマで2023年を始めたいと思います。

●当相談室で語られるお子さんの言葉

「だるい」「お腹（または頭）痛くて学校行けない」「朝起きられない」「学校つまらない」「勉強したくない」等、様々な気持ちをこの5つの言葉で表してくれることが多いです。これを学校は「無気力・不安」として不登校要因にしているのですが、それは結果であり要因ではないと思っています。

お子さんとの対話を続けているうちに、「先生がいつも怒ってる」「友達と話していると疲れてくる」「授業についていけない」「(学校にいる間)お母さんが心配だから行かない」「学校でも家でも空気読むのがしんどい」等、お子さんなりに気持ちを掘り下げて一生懸命言葉で伝えようとしてくれます。肌感覚として、話せる子と話せない子の割合的には半々といったところです。

●気持ちを言語化するには様々な力が必要

家族だからといって何でも話せる訳ではありません。親子関係をこじらせているご家庭もありますから、そもそも会話自体が少ないでしょう。思春期なら尚更難しいですね。発達特性で言語機能が低いお子さんもおられるので、うまく気持ちが伝えられず癇癪を起こすことがあるかもしれません。お互いが納得するまでのプロセスにはどちらも忍耐が必要になります。親も自分の気持ちに余裕がないと「耐える」「待つ」は出来ないことかもしれません。

●SOSのサインに気づくことが出来るか

当然ながら子どもは「助けて」という援助希求力が乏しいと言えます。既に不登校や引きこもり、いじめ、非行、希死念慮が見られる場合には、対話するその言葉の裏に「助けて」という気持ちがあることを常に意識しなければなりません。だからと言って特別何が出来るとは無いのですが、子どもが感じている辛さを聴き、それをこころに閉じ込めて蓋をしまわれないよう対話しながら、少しずつその痛みとの関わり方を大人と一緒に考えてあげてほしいのです。

一番避けたいのは、子どもが辛さをこころに閉じ込めて蓋をしまい、ひとりで抱え込んで孤立してしまうことです。辛さを抱えた子どもがいたら、決して「見て見ぬふり」「なかったこと」にしないで下さい。

時には教員が保護者と、保護者が子どもと、子どもと教員が、それぞれが対立してしまうことがあるかもしれません。やはりここでも対話を続けて行く他に方法がありません。出来るだけ立場を超えた関係者を間に挟みながら、保護者や学校、医療への不信感や他責感へ発展しないように丁寧に対話を進めたいものです。

●これからの子ども達を取り巻く環境の変化

近年、家族の形が変わってきています。親子や夫婦の関係性はその家庭それぞれです。しかし、学校教育はあまり変化がないのかもしれません。小中学校の不登校は全国24万人以上で毎年増加傾向です。悲しいことに子どもの自殺者も増加しています。ここまで社会問題化された今、なぜ対策が遅れているのでしょうか。「今の学校は標準が狭すぎる」と信州大学の本田秀夫先生がおっしゃっています。もしも、好きな席で授業が受けられたら、楽な姿勢・服装で授業が受けられたら、宿題がなくなれば、好きなように図工作品が作れたら、体育座りがなくなれば、マラソン大会がなくなれば、、見直せるものはいくらでもありそうです。

標準がグッと広がれば皆が「フレームイン」することが出来ます。学校だけではなく、そんな世の中を大人も子どもも皆一緒に目指していきたいものですね。